

八丈島方言の研究

——語彙的特色と人体語彙——

中 本 正 智

八丈島方言は奈良朝期の東歌の言語的特徴のいくつかを残していることですでに広く世に知られている方言である。これら残存する古形を解明することは、すでに多くの日本語で失われて、その考察を不可能にしている日本語の歴史的発展過程の重要な一面を明らかにしてくれるにちがいない。このような観点からいくつかのすぐれた研究もすでに行なわれている。ところが、この方言の重要性に比して、その方言の総体を調査研究した文献は意外に少ないことに気づく。方言が急速に失われていくことを思うとき、これらの方言を総体的に記述する必要を痛感するのである。

このようなわけで、東京都立大学では、国語学ゼミのメンバーを中心に時間のゆるす限り、八丈島方言の調査を実施することにした。昭和50年には末吉（洞輪沢）集落を中心に、昭和51年・同54年には三根集落を中心に現地調査を実施し、現在、継続中である。インフォーマントは必要に応じてあげることにするが、

末吉集落 沖山歌子氏（64歳）

三根集落 奥山利平氏（71歳）

を頭に、多くの方々であった。この島で生まれ、島で育ち、島で生きた多くの方々のご協力に感謝するものである。中にはすでに世を去られた方もある。ご冥福を祈りたい。

八丈島は伊豆七島の中、もっとも外側に位置し、東京から南へ290キロ、黒潮を乗り越えて太平洋の中に浮かぶ小島である。周囲59キロ、面積70平方キロである。昔から「鳥も通わぬ八丈島」とか、「流人の島」と言われてきた。

東京竹芝桟橋から毎晩出航する定期船がある。夜の11時に出帆し、次の朝八丈島に接岸する。空路もひらけ、羽田からの定期便がある。

絶海の孤島であるため、昔は住みづらい島であった。凶作・飢饉が多く、古記録には悲惨な餓死の様子がつづられているほどである。地理的に流刑に適しているところから、幕府はこれを利用した。黒潮のため気候が温暖であり、植物の発育が良好で、現在では熱帯植物・観葉植物の島としても知られるようになった。島

には東山と西山の二つの山がある。俗に、それぞれ三原山と八丈富士と称している。

江戸時代には流人の島として幕府の重要な行政下にあった。現在は東京都に含まれている。

一時期には過疎の傾向が強かったが現在では観光の島として定着しつつある。夏には人口の移動がはげしく、島の人口の3倍ぐらいになる。

これまで幾度か現地調査を実施し、これからも調査を重ねて行くわけだが、これまでの調査資料をそろそろまとめていくことにする。集積した資料が埋没しないためにも。

今回は、末吉集落におけるいくつかの語彙的特色と人体に関する語彙を記述することにした。

語彙的特色

一日の時間帯に関する語彙

joake （夜明け）

tommete （早朝） 地元では「東明天」をあてて
が、語源は平安朝期の「つとめて」にさかのぼる。

asa （朝）

go:ramai （午前中）「昼食前」という表現で「昼食」を基準とする。go:ra は「昼食」のこと。

go:ra （昼） 本来は「昼食」の意であったが、時間の表現に用いられ、「正午」の意となる。「午後から出かける」の「午後から」は go:rakara～と表現する。

ju:gata （夕方）

joru （夜）

ban （晩）

jonaka （夜中）

maiasa （毎朝）

me:ban （毎晩）

jodo:fi （一晩中）

hannitji (半日)

ちなみに、一日の食事名をあげる。

asake (朝食)

go:ra (昼食)

jo:ke (夕食)

tsagafi (3時頃のおやつ)

日・月・年を表わす語彙

今日を0とし、昨日を+1、一昨日を+2のように表わし、明日を-1、明後日を-2のように表わすとすれば、八丈方言の日を表わす語彙は次のようになる。

- | | | | | |
|-----|-------------------|----------|-----|------------|
| + 1 | kino: 0 | ki: (今日) | - 1 | asu |
| | | (昨日) | | (明日) |
| + 2 | utfitji: | | - 2 | asatte |
| | | (一昨日) | | (明後日) |
| + 3 | ottsakinoutfitji: | | - 3 | sannasatte |
| | | (一明昨日) | | (明明後日) |
| + 4 | jokkamai | | - 4 | figasatte |
| | | (一昨昨日の前) | | (明明後日の次) |

昨日、今日、明日が基本的な語で、他は派生語である。

mainitji (毎日)

itfinitjioki (一日置き)

itfinitjidgu: (一日中)

それぞれの日の朝は、

0 ki:nutommete
(今朝)

- | | | | |
|-----|----------------|-----|----------------|
| + 1 | kini:nutommete | - 1 | afitanotommete |
| | (昨朝) | | (明朝) |

のように表わす。

それぞれの日の夜は、

- | | | | | | | |
|-----|----------------|-----------|-----|--------------|--|------|
| + 1 | kininojoru 0 | ki:nojoru | - 1 | afitanojoru | | |
| | | (今晚) | | (今夜) | | (明晩) |
| + 2 | utfitji:nojoru | | - 2 | asattenojoru | | |
| | | (一昨晚) | | (明後日の晩) | | |

のように表わす。

月については

- | | | | | | |
|-----|--------------|-----------|------|----------|------------|
| + 1 | me:notsuki 0 | konotsuki | - 1 | raigetsu | |
| | | (先月) | | (来月) | |
| | | | (今月) | - 2 | saraigetsu |
| | | | | | (再来月) |

のように表わす。

年については、

- | | | | | | | |
|-----|-------------|--------|-----|----------|--|------|
| + 1 | kjonen 0 | kotofi | - 1 | rainen | | |
| | | (去年) | | (今年) | | (来年) |
| + 2 | ototofi | | - 2 | sarainen | | |
| | | (一昨年) | | (再来年) | | |
| + 3 | sakiototofi | | - 3 | sannejgo | | |
| | | (一昨昨年) | | (再来年の次) | | |

のように表わす。

生物に用いる接尾辞「メ」

八丈方言では多くの生物に「メ」を付ける。

hettfome (とんぼ)

kabume (蚊)

he:me (蠅)

jamme (虱)

numme (蚤)

kemufime (毛虫)

dairome (なめくじ)

kaerume (蛙)

小動物にはほとんど「メ」をつけている。鳥などはどうか。

njatori me (にわとり)

pijo me (ひよこ)

ga:to me (鳩)

karasu me (鴉)

kokko me (あかはら)

家畜についても

ufi me (牛)

ba me (牝牛)

tsoko me (仔牛)

uma me (馬)

buta me (豚)

jagi me (山羊)

nekkome (猫)

のように、大小にかかわらず、「メ」をつける。

魚類についても

koi me (鯉)

dodjo: me (どじょう)

kingjo me (金魚)

φugu me (ふぐ)

tako me (蛸)

のように「メ」をつける。

ただし、すべての動物に「メ」をつけるのではなく。

udzimufi (蛆)

sudzume (雀)

katsuo (鯉)
konasama (蚕)

のように、「メ」を付けない語もある。

この接尾辞「メ」は、どのような語から発達したものであろうか。それは、おそらく女性を表わす「め」から発達したものと考えられる。「め」(女)は、中央語においては、女性の社会的な地位の変化に応じて、卑称の、たとえば「あいつめ」という場合の「め」を生み出した。八丈方言の「メ」は、この中央語の変化とは対照的に、「女」の「かわいらしい」面が意味的に発展して、動物の接尾辞として定着したものであろう。同類の「メ」は、茨城・佐渡ヶ島にもある。

ちなみに、東北方言にみられる接尾辞の「コ」や琉球方言の「グ」は、生物のほか無生物にも用いられる。八丈方言の「メ」は生物だけに限られているのが特色である。

「行く」と「来る」

東京語の「行く」と「来る」の意味を分析して記述すれば、

行く＝表現者の領域から遠ざかる移動。表現者はつねに移動の出発点側に立っているか、あるいはそこにいる意識をもっている。

来る＝表現者の領域へ近づく移動。表現者はつねに移動の目標点側に立っているか、あるいはそこにいる意識をもっている。

となる。この二語は「表現者の領域意識」と「移動方向」との関係によって成り立っていることがわかる。

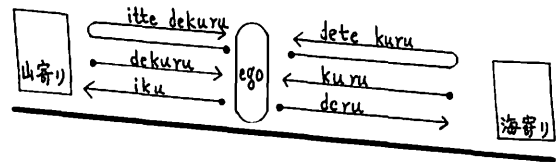
八丈方言の「行く」と「来る」はどうか。八丈方言では、東京語の「表現者の領域意識」と「移動方向」の要素の他に、oki(海寄り)に向かう移動か、jaburo(山寄り)に向かう移動か、という要素が加わっている。

ego(表現者)が山寄りに居て、海寄りとの関係において、「行く」はderuといい、「来る」はkuruという。そして「行って来る」はdete kuruという。deruは「出る」を表わす語が意味的に発展したものであろう。

egoが海寄りに居て、山寄りとの関係において、「行く」はikuといい、「来る」はdekuruという。そして「行って来る」はitte dekuruという。

これを図示すると次のようになる。

八丈方言の「行く」と「来る」



人体に関する語彙

体の部分に関する語彙

頭

tsuburi (頭)

tsuburiga jameru (頭が痛い)

tsuburiga bo:i: (頭が大きい)

ſirakumu (しらくも), 末尾はuである。

φuke (ふけ)

gaikotsu (頭蓋骨)

no:ten (脳天・ひよめき), 特に「ひよめき」を表わす語はない。

kumbone (ぼんのくぼ)

tsuburinoke (頭髪), tsuburi だけでも「頭髪」の意になる。tsuburi suku (頭髪をとかす)。

ſaga: (白髪)

ſagaga deta (白髪が出た)

nukege (抜け毛)

tsuntsuri (髪のちぢれ)

okurege (おくれ毛)

maegami (前髪)

sakajaki (髻をそること)

udzu (つむじ), tsumudzi ともいう。

φidari maki (左巻き)

φutatsu (二つ巻き), 「二つ巻き」の子は腕白と

見られる。φutatsu waga arukara

okkanai (二つ巻きだからこわい)

tento: hage: (禿げ頭)

hageru (禿げる), hage tento: (禿げ頭)

tento: jakko (禿げ頭の人), jakko は「長男」のこと。

kaburu (被る), bo:ſio kaburu (帽子を被る)

顔

kao: (顔)

fite: (額), fite:ga giri: (額がひろい)

現在は fitai ともいう。

odeko (おでこ)

jiwa (しわ), jiwaga joru (しわがよる)

komekami (こめかみ)

mamige (眉), mami ともいう。

mamino aida (みけん)

majudziri (眉尻)

目

manako (目)

medziri (目尻)

medama (目玉), mentama: ともいう。

firome (白眼)

kurome (黒眼)

fitomi (瞳)

mamige (まゆげ)

matsuge (まつげ)

mamabuta (まぶた)

φutae (二重まぶた)

fitoe (一重まぶた)

megafira (目頭)

saggarime (たれ目)

aggarime (上り目)

mekkatji (片目)

urame: (やぶにらみ), 「裏眼」という表現。

toraho:me (トラホーム)

torime (鳥目)

tsikame (近目)

monomurai (ものもらい)

mekura (めくら)

menada (涙), 上代語では「なみ甲た」であり、
後期には「なみ甲だ」となる。琉球では nada と
いう。

mejane (目やに)

mebataki (まばたき)

mekubase (めくばせ)

memawari (めまい), 「目廻り」という表現。

mema:ri ともいう。

mekakufi (めかくし)

naku (泣く)

miru (見る)

mitsumeru (見つめる)

nemeru (にらむ)

mabufi: (まぶしい)

鼻

hana (鼻)

hana ase (鼻汗)

hanano ana (鼻の穴)

hanage: (鼻毛)

fihibana (獅子鼻)

wafibana (わし鼻)

dag gobana (団子鼻)

hanagoi (鼻声)

hanadziru (鼻汁)

aoppana (青鼻)

hanadzi (鼻血)

hanakusu (鼻くそ)

kamaru (におう), においの良し・悪しに関係が
ない。

kamatte kamatte (におって, におって)

φu:mi (良いにおい)「風味」という表現。

ibiki (いびき)

ibikio kaku (いびきをかく)

kufami (くしゃみ)

耳

mimi (耳)

mimikusu (耳垢), 椿油を入れてとる。

mimbare: (耳だれ・中耳炎)

tsumbo: (つんぼ), 糸を紡ぐときに音が出なくな
るものにもいう。

tsumboni naru (つんぼになる)

miminari (耳鳴り)

miminariga fita (耳鳴りがした)

kiku (聞く)

頬

ho: (頬)

ho: butareta (頬をぶたれた)

ho:ppeta (ほっぺた)

bin (頬毛の部分)

ho:pon (おたふく)

ho:bone (頬骨)

ekubo (えくぼ)

hokkaburi (頬かぶり)

hatjimaki (はちまき)

ho:hege (髯)

口

kutʃi (口)
 kutʃibiru (唇)
 uwekutʃibiru (上唇)
 ʃitakutʃibiru (下唇)
 ho:hege (髯の総称)
 tʃobiɕige (口髯)
 jaɕige (顎髯)
 o:ʃi (おし), ofimbo: ともいう。
 domori (どもり), domoru (どもる)
 mitsukutʃi (みつくち)
 tsuba (唾)
 jodare (よだれ)
 tan (痰)
 ʃita (舌), 現在は bero ともいう。

歯

nukaba (歯)
 nukabaga jamete (歯がいたくて)
 maeba (前歯)
 okuba (奥歯)
 itokiriba: (犬歯)
 haguki (歯茎)
 jaeba (八重歯)
 soppa (出歯)
 muʃiba (虫歯)
 hakusu (歯くそ)
 mukutʃi (無口)
 oʃaberi (おしゃべり)
 kutʃibue (口笛)
 akubi (あくび), akobi が本来の方言。
 iki (息)

ikio su: (息をすう)
 ikio su (息をする)

ʃiki (咳)
 ʃikio su (咳をする)
 geppu (げっぷ)
 koi (声)
 ju: (言う)

mono: ju: (ものを言う), itta: (言った)
 hanasu (話す)
 donaru (叫ぶ), donarakasu (喧嘩などで叫ぶ)
 ɕi:kuru: (大声で呼ぶ), 「吠え狂う」という表現
 か。
 kamu (食う)

kande katasu (食べてからかたづける)
 agaru (召しあがる)
 agarijare (召しあがれ)
 nomu (飲む)
 nomogani: (飲むように)
 haku (吐く)

顎

agu (顎)
 kasuge: (顎のつけ根)
 uwaago (上顎)

喉

nodobue (喉), nodo ともいう。
 nodoga kawaku (喉がかわく)
 nodo: hosu (喉をほす)
 kutʃiga kawaku (口がかわく)
 nodomame (喉ぼとけ)
 nodobotoke (喉ひこ)

首

kubi (首)
 kubisudʒi (首すじ)
 jeri (うなじ), 後項は kubbo という。

肩

ke:na (肩), 本来は「腕」の意であるが, 「肩」
 を指すようになった。kata (肩) ともいう。
 kataga haru (肩がこる)
 sammai (かいがら骨)
 kembiki (けんびき)

腕

ude: (腕)
 ninoude (肩から肘までの部分)
 ɕidʒi (肘から手首までの部分)
 ɕidʒinoko (肘)
 tʃikara (力), tʃikara kobu (力こぶ)

手

te (手)
 tekubi (手首)
 tenoɕira (手のひら)
 tenosudʒi (手の筋)
 tenoko: (手の甲)

gegkotsu (こぶし)
 jubi (指)
 ojabubi (親指)
 sitosafi (人差指)
 nakajubi (中指)
 kusurijubi (薬指)
 kojubi (小指)
 sumon (指紋), 「手紋」という表現か。
 teno udzu (手のうずまいてる紋)
 tsume (爪)
 tsume aka (爪垢)

脇

waki (脇)
 wakige: (脇毛)
 wakiga: (脇臭)
 wakibara (脇腹)
 jitabara (脇の下方)

胸

do: (胴)
 mune (胸)
 abara (肋骨), abarabone ともいう。
 munage (胸毛)
 oppai (乳), tfitfi は「乳液」のこと。
 tfigata (乳房)
 tfitfikubi (乳首)
 midzuotfi (みずおち)
 hara (腹)
 haraga kuttsuku (腹がへる)
 haraga juwakja (腹がすいた), juwai,
 juwakja は「ひもじい」の意。
 haraga jameru (腹がいたい)
 hettsoho (臍)
 hesonoo (臍の緒)
 hesonoo kiru (臍の緒を切る)
 debeso (出臍)
 hedaka (背中)
 hedaka sutte tamo:re (背中をさすって
 ください)
 sekidzui (脊髄)
 sesudzi (背筋)
 sebone (背骨)
 kofu (腰)
 kotsuban (骨盤)

dzakotsu (坐骨)
 jiri (尻)
 biteikotsu (尾骶骨)
 ko:mon (肛門)
 jiri (陰門)「尻」にもいう。
 tfintfin (陰茎) 幼児語だけでなく、一般的に用い
 られる。
 tama (睾丸) kinnotama, kintama: ともいう。
 faga: (陰毛) 頭髪以外の毛をいう。「頬髯」は
 ho:faga という。

*「性交する」については回答なし。

phi:gi: (内臓) 魚・鳥・牛など動物一般の内臓に
 ついて用いられる。

findzo: (心臓)
 kikan (気管)
 hai (肺臓)
 kandzo: (肝臓) kimo ともいう。
 dzindzo: (腎臓)
 bo:ko: (膀胱)
 tfo: (腸)
 ibukuro (胃)
 fo:tfo: (小腸)
 daitfo: (大腸)
 kuso (大便)
 kuso: maru (大便をする・糞をまる)
 fomben (小便)
 fomben su (小便をする)
 qi:ri (屁)
 qi:riga deru (屁が出る)

脚

afi (足)
 putomomo (腿)
 mata (股)
 tsugume (膝) dzidzakabura ともいう。
 sune (脛)
 komura (腓)
 afikubi (足首)
 ki:bufi (くるぶし) sotoki:bufi (外側のくる
 ぶし) utfiki:bufi (内側のくるぶし) ウチキ
 ーブシは蚤にも喰わせるなど言われている。
 akki: (かかと)
 afinoko: (足の甲)
 afinocira (足の裏)
 tfitfitsukadzu (土踏まず)

dakkju: (脱臼) 普通にはどこそこが hadzureta
(はずれた) と表現する。

tsuge: (関節)

tsuge:ga hadzureta (関節がはずれた)

tsumasaki (爪先)

ϕumitsukeru (踏みつける)

kettsumaguru (つまずく)

midzumufi (水虫)

bikko (跛)

bikko: ϕiku (跛をひく)

体の全体に関する語彙

inotfi (命)

karada (体) fitai (死体)

hada (肌)

fappo:ge (鳥肌)

fappo:gega takaru (鳥肌がたつ)

fimojake (霜やけ)

kawa (皮)

fiwa (しわ)

fiwaga takatte (しわができて)

nafige (うぶ毛)「生む」を nasu という。「生し毛」という表現。

adza (痣)

kakke: (蒙古斑) 蒙古斑は親の腹にある何かが残るものと言われている。

kusube (ほくろ)

kobu (こぶ)

tako (たこ)

mame (まめ・水ぶくれ)

abata (あばた)

nikibi (にきび) 昔は「にきび」はほとんど出ず、その語もあまり使わなかった。

haremono (腫物)

kasabuta (かさぶた)

umi (膿)

umu (化膿する)

haremonoga unda (腫物が化膿する)

kidzu (傷)

jakedo (やけど)

tji (血)

aosudzi (血管) kekkan ともいう。

niku (肉)

kinniku (筋肉)

hone (骨)

ibo (疣)

ϕufi (節)

ase (汗)

asema (あせも) アセモではなく、アセマである。

aburaase (脂汗)

aka (垢)

ϕikitsuke (けいれん)

tfitfigaeru (筋をちがえる)

neori (寝ちがい)「寝折り」という表現。

afio ϕinneru (捻挫する)

kede:jami (仮病)

keϕko:tai (健康体)

kadzeϕiki (風邪)

harakudafi (下痢)

iredzumi (入墨)

ohaguro (お歯黒)

ikiru (生きる)

nasu (生む)

marubu (死ぬ) 人や生物一般に言う。

ijoga ippe marondajo (魚がたくさん死んだよ)

kusaga marunda (草が枯れた)

korosu (殺す)

ϕutoru (肥る・太る)

jaseru (痩せる)

neru (寝る) jasumu (休む)ともいう。

jasumu は「寝る・横になる」の意をもつ。

okiru (起きる)「目覚める」の意もある。

jume (夢)

jumeo miru (夢を見る)

e:mu (歩む)

keϕken (片足跳)

tobiru (走る)

tobite tobite kuru (走って走って来る)

tatsu (立つ)

kagamu (屈む・膝を折って低くなる)

kogomu (屈む・腰を折って低くなる)

suwaru (坐る)

hau (這う)

tobu (飛ぶ)

atsuke: (あぐら)

atsuke: o kaku (あぐらをかく)

ϕidzamadzuku (正座する)

kafikomaru ともいう。

katsugu (担ぐ) 天秤棒や丸太などをかつぐ。
 sasagu (頭にのせる)
 八丈では頭に桶をのせて水汲みなどをした。
 fou (背負う)
 dzu: sageru (うつむく)
 kaku (搔く)
 ke:garu (かゆがる)
 kamaru (嗅ぐ)
 kamu (食う・食べる)
 kuttfigiru (噛みつく)
 juwai (ひもじい)
 ojogu (泳ぐ)
 çimmagaru (かじかむ)
 hotobiru (豆や指などふやける)
 øujakeru ともいう。
 urumu (しわになる)
 tega urumu (手がしわびる)
 hotooru (暑くなる)
 fafai (熱い)
 ojuga fafai (お湯が熱い)
 netsuga dete karadaga fafai (熱が出
 て体が熱い)
 kogüiru (こごえる)
 kusuguru (くすぐる)
 mutsuka:fi: (くすぐったい)
 çakkoi (冷たい)
 sudzufi: (涼しい)
 nurui (ぬるい)
 ke:garu (痒がる) のげっばいかゆみなどにいう。
 jameru (痛む) 「いたい」という形容詞のかわり
 に「痛む」を用いる。
 tsuburiga jameru (頭が痛い)
 nukabaga jameru (歯が痛い)
 kidzuga jameru (傷が痛い)

karui (軽い)
 omui (重い)
 kiru (着る)
 nuku (脱ぐ)
 tabio nuku (足袋を脱ぐ)
 geta nuku (下駄を脱ぐ)
 dzo:ri nuku (草履を脱ぐ)
 hebirao nuku (着物を脱ぐ)
 haku (履く)
 足袋・下駄・草履を haku という。
 jami (病気)
 kusuri (薬)
 doku (毒)
 kowai (疲れる)
 okkanai (恐い)
 nekomu (寝こむ)
 jaçio jaku (炙をすえる)
 fisei (姿勢)
 gittfon (左利き) gittfo: ともいう。
 sekkogo (せむし)
 sageru (持つ)
 omokute sagekiranai (重くて持ちきれな
 い)
 okane sageru (お金を持つ)
 高知でも同様にサゲルが「持つ」の意である。

参考文献

- 1948 「八丈島方言の研究——特に上代性の遺存につい
 て——(1)」北条忠雄『日本の言葉6』
 1950 『八丈島の言語調査』国立国語研究所 秀英出版

〔表記について〕

ø は両唇摩擦音, g は軟口蓋破裂音, : は長母音

卒業論文「他動詞「する」の
用法の分析」要旨

佐藤悦子

1. 「する」は日常生活で頻繁に使われる語であるが、その表わす意味内容は非常に抽象的であり、文脈によって多種多様である。本論では、を格をとる他動詞「する」が、どのような構成要素と共起して、どのような意味を表わすかを明らかにしたい。
2. 「する」は英語の 'do' と、表わす意味内容や多義性、抽象性といった点で似ている。しかし 'do' の果たしている「代動詞」としての側面を「する」が持っているとはいえない。ここでいう「代動詞」とは「前方に用いられた動詞または動詞を中心とする語群の反復を避けるために用いる動詞」（『現代英語学辞典』成美堂）のことである。確かに、「誰がそれを取りましたか——私がしました」のような言い方はでき、'do' の代動詞的用法と類似しているが、「する」の場合、代用できる動詞に制限があり、前方動詞の内容を指示しているとはいえない。先の例文の「する」は「——私がやりました」「——私がいたしました」と同様、ある事象を他の動詞を用いて言い直したものと考えた方がよい。
3. 奥田（1968—72）では、を格の名詞と動詞で構成される連語を、それらのむすびつき方によって分類している。（ここでポイントとなるのは、同一文中に共起するその他の単語と各構成要素のカテゴリカルな意味である。）これに従って「する」の連語がどのようなむすびつきを作るのかを検討してみた。その結果は下記の表のようにまとめられる。
- これは、森田（1977）の「する」の分類とはほぼ照応し、その妥当性が確認できる。それぞれについて、「する」の意味はつぎのように記述することができる。
- I. 面的な物（を格名詞）の表面を、ある物または

- ある場所（に格名詞）に接触・接着させてとりつける。
（「帯をする、薬指に指輪をする……」）
- II. 主体（が格、「は」の名詞）がある変化（を格名詞）を実現する。
（「彼は勉強をする、川が氾濫をする、母が悲しい顔をする……」）
- III. 人、物、事（を格名詞）のある状態（に格名詞・形容詞）に変化させる。
（「米を飯にする、彼を医者にする……」）
- IV. 主体（が格、「は」の名詞）が、人、物、事（を格名詞）に対して何らかの判断・決定（に格名詞）をくだす。
（「彼を師とする、納税を義務とする……」）
4. 前述した分類のうち、IIの用法は「形式動詞（具体的属性概念が希薄で陳述の力だけがある動詞）」として指摘されている。しかし、この種の内容規定的なむすびつきは「する」に限られるものではない。「英語を話す、料理を作る……」などもそれである。「する」は、「話す、作る……」といった動詞と比べて抽象的ではあるが、これだけを取りあげて「形式動詞」とするほどの材料はない。
5. 主体（が格、「は」の名詞）が〈与え手〉〈受け手〉を表わす「あたえる、うける」との比較検討から、二者が関与する事象の表現において、「する」の能動性、自発性が確認できた。ここで「能動性」とは「主体が他者に働きかける」表現、「自発性」とは「主体が自然に働きかけられる」表現を指す。
- 参考文献
奥田靖雄（1968—72）
「日本語文法・連語論 を格の名詞と動詞とのくみあわせ（一）～（九）」『教育国語』
森田良行（1977）
『基礎日本語』角川書店

	を格名詞の表わす意味	共起する単語とその意味
I. とりつけのむすびつき	物	に格の名詞（物）
II. 変化の内容規定的なむすびつき	変化	
III. 対象の変化のむすびつき	人、事、物	<u>に格の名詞、形容詞</u> （結果＝状態）
IV. 知的な態度のむすびつき	人、事、物	<u>と格の名詞</u> （判断・決定）

（傍線は共起が義務的なもの）

卒業論文「入水動詞の分析」要旨

服 部 貴 義

水と関係のある動詞のうち、水に入りこむことを表す動詞を「入水動詞」と名づけて分析を試みた。本論でとり扱った動詞は、「つかる」「つける」「ひたる」「ひたす」「しずむ」「しずめる」「もぐる」である。それに、「もぐる」と関連して「かくれる」「ひそむ」なども分析の対象とした。「入水動詞」とは言いながら、水と関係のない用法もあるが、それらも扱った。そして最後に、水に関する場合を中心に整理してみた。

「つかる」「ひたる」「つける」「ひたす」の4語は1つのグループとみなすことができる。他の動詞とは違って、水に入る（入れる）ことによって水と接触する（させる）という特徴を持っているのである。「しずむ」や「もぐる」の場合も、もちろん水と接触しているが、特にこれに注目してはいない。しかし、上の4語には、水に接触すること、ぬれることが重要なのである。

「つかる」と「ひたる」は心理性の有無によって区別した。「ひたる」は多くの場合、心理的快感を伴うが、「つかる」は伴わない。また、「つかる」には「ひたる」には無い、つけものが完成するという用法があった。「ひたる」は「感激にひたる」など抽象的な用法があったが、「つかる」にはない。

「つける」と「ひたす」は、滲透性の有無により区別した。「つける」は、まわりの液体が対象物の内部にしみこんでしみこまなくてもよいが、「ひたす」は多くの場合、しみこむと言えそうである。ただし、「つける」も、つけものをつくるという場合は、しみこむと言える。

これらの動詞は、水面近くに物体が位置するという特徴を持っていると考えられがちだが、それは付随的な特徴として処理した。深く入ると心理的快感を伴うことが少ないから「ひたる」は言いにくく、「ひたす」は、深く入らないうちに、物体内部に水がしみこむことが完了してしまうので言いにくいのではないかと考えた。「つかる」「つける」の方は、「ひたる」「ひたす」に比べれば、深く入る場合でも言えそうであるが、深く入るには移動を伴い、移動を表す「しずむ」などで言うことが多いので用例が少ないのではないか。

「しずむ」と「もぐる」は共に移動を伴う。「しずむ」は、重力にしたがった液体表面から到達点までの

移動であるが、もぐるにはそのような制限はなく、いったん水中に入ったらどう動こうと自由である。二格にとり得るものとしては、「しずむ」の方は、液体に限られており、それ以外の用法は派生的用法と考えられるのに対し、「もぐる」は、何かにとり囲まれるようにしてまわりから見えない状態になることが意味特徴の中心であるから、雪や穴、ふとんなど様々なものがある。水は「もぐる」のとおり得る多くのもののうちのひとつであると考えられる。二格に水をとる場合に限って言えば、「しずむ」は無意志的、「もぐる」は意志的というふうに区別できるが、その他の場合は、「もぐる」が無意志的に用いられた例があった。

「もぐる」は、「かくれる」「ひそむ」などとも似ている点がある。それは、外部から見えなくなるという点であった。「ひそむ」は、目的意識が強く、かなり強い意図が感じられるが、「もぐる」は、その動作自体が問題であり、意図的であるということを動詞の意味特徴とすることはできない。「かくれる」はどちらの場合も言える。また、かくれ方としては、「かくれる」は、物の陰などに入るなどして、視点と対象物との間に物が置かれることで見えなくなってもよいし、何かにすっぽりおおわれてもよいのであるが、「もぐる」は何かにすっぽりと囲まれているようではなければならない。その時、接触、もしくは近接していなければならないのである。さらに、「もぐる」は移動という要素がかなり重要であり、「かくれる」「ひそむ」と違う点である。「もぐる」はかくれることを表すこれらの動詞と入水動詞との接点に位置する動詞である。

修士論文「東京式・京阪式の接触地帯

のアクセント

——高知県西部方言の場合——」要旨

坂 東 多衣子

本論は、高知式（京阪式）アクセントと、幡多式（東京式）アクセントの接触する、高知県西部の山間部に位置する5地点のアクセントの変化過程を、記述・考察することを目的としている。

序論においては、本論の目的・考察の視点、本論の土台となった1976年の調査概要、そして今回の調査概要、調査地の概観について述べ、従来の研究についてもふれた。

まず、本論第一章においては、高知県高岡郡窪川町秋丸、幡多郡大正町弘瀬、上岡の3地点については、

老年層（60～80歳代）、壮年層（50歳代）、青年層（15～20歳）、少年層（10～12歳）の4世代を、老・壮・青年層を中心に、北の川、上宮の2地点は老・青年層を中心に、主に質問調査によって得た1・2・3拍名詞、2・3拍動詞・形容詞についてのアクセント体系の記述・考察を行ない、次の点を述べた。

- (1) 秋丸は、老・壮年層は高知式アクセント、青・少年層は準高知式アクセントを示し、高知式アクセントの尾高型の頭高型化への変化を、壮年層から青・少年層への過程で示している。
 - (2) 弘瀬は、老年層は高知式アクセント、壮年層は準高知式アクセント、青・少年層は北の川式アクセント（例えば、2拍名詞の場合、I【●●(▶)】／II III IV V【●○(▷)】）を示すという著しい変化を示している。
 - (3) 上岡は4世代共、準幡多式アクセント（例えば2拍名詞の場合、I【●●(▶)】／II III【●●、○●▷】／IV V【●○(▷)】）を示し、老年層＞壮年層＞青・少年層順にその相が安定してきている。
 - (4) 北の川は、老・青年層共、北の川式アクセントを示す。
 - (5) 上宮は、老年層は準幡多式アクセントを示しているが、青・少年層は北の川式アクセントを示している。
- 以上より、
- (6) 上記5地点は、すべて高知式アクセントから変化したアクセントであること。
 - (7) 高知式アクセントからの変化の際には、次の変化がおこる。

- a：尾高型の語の頭高型化
- b：中高型の語の頭高型化
- c：頭高型の語の中高型化
- d：アクセントの山を波及させる変化

上記4種のうち、aが最もはやくおこり、その変化がかなり進んだ後に、b c dがおこり始める。そのうち、dがおこるのが、最も遅い。

- (8) 青年層が、揃って北の川式アクセントを示す、弘瀬・北の川・上宮は、弘瀬では、高知式アクセント＞北の川式アクセントへ、北の川・上宮では、高知式アクセント＞準幡多式アクセント＞北の川式アクセントへと変化したと考えられる。この場合、北の川と上宮の変化の要因としては、窪川文化圏を背景とした高知式アクセントの影響が考えられ、この地区の小中心地である北の川が、最も早くから、北の川式アクセントを示すようになったと考えられる。

また、弘瀬・上宮の青・少年層の北の川式アクセント化については、上記の理由に加え、学区が、大きな要因としてあげられる。

- (9) すなわち、この5地点は、秋丸は、高知式アクセントが、内的変化を進めている相、上岡は、高知式アクセントが準幡多式アクセントへ変化した、さらに幡多式アクセント化しつつある相、そして弘瀬・北の川・上宮の北の川地区は、高知式アクセントが、独自のアクセントへと変化した相と、考えられる。
- (10) また、老年層のみに行なった読みの調査では、質問調査との差がみられた。このように、不安定なアクセントを示す地点では、従来、読みのみの調査が多く行なわれていたが、読みのみの調査では危険であるといえよう。

次に、本論第二章においては、弘瀬と上宮の2地点で行なった、成員の約2割にあたる人数の2拍名詞のアクセントの部分体系調査について、次のような考察を行なった。

弘瀬は、ほぼ30歳代後半までは、高知式アクセント、または準幡多式アクセントの4型の相を示しているが、それが、20歳代後半～30歳代前半では3型となり、20歳代前半以下は、すべて北の川式アクセントを示している。

これは、大正町内でも、最も窪川町に近い所に位置しているため、高知式アクセントの影響下において、内的変化が進んでいたところへ、若年では、学区という大きな要因が働き、変化を促進させたものと思われる。

上宮では、老・壮年層の中には高知式アクセントから変化したことをうかがわせる相を示すものもあるが、ほとんどが、準幡多式アクセント、若年層もほとんどが、北の川式アクセントを示している。

その北の川式アクセント化の要因としては、窪川文化圏を背景とした高知式アクセントの影響の他に、性別、通学する高校、学区、接触する人間、職場等が、その要因として考えられる。

そして、更に、準幡多式アクセントを示しているものの中には、他のアクセントを話す人との接触によって生じる型知覚の混同、そしてその結果おこる型知覚の薄れにより、いずれは曖昧アクセントへと変化してゆくことを予想させる相を示しているものもいた。

このように、上記2地点は、個人によって、その示すアクセントに差があることをみた。

最後に、この高知県西部の接触地帯のアクセントは、

大きくは、高知式アクセントから、幡多式アクセントへの変化の中で、その変化のおこる時期の相違により、異なった相をみせていると考えられることを述べた。

修士論文「待遇表現行動の研究—課題提起 と八丈島洞輪沢における記述—」要旨

沖 裕 子

本論文は、5章よりなる。第1章では、待遇表現研究のあり方をめぐっての私見を述べ、第2章以下では、八丈島洞輪沢集落における全数調査をもとに、第1章で提起した課題のいくつかについて、実証的に論究した。

第1章「待遇表現行動のモデルと研究上の問題点」

待遇表現を、「主体の外界に対する配慮が言語表現の上に反映されること、またその表現」と考える立場からは、研究の際、「待遇表現行動」の視点に立脚することがその本質をよくとらえ、また、実証的な研究の展開を可能にすると考えていることを述べた。また、待遇表現行動研究の方法としては、まず仮説としてのモデルを構築し、実際の待遇表現行動と一致したものにさせることを最終的な記述目標とすることを述べた。

モデルの細部を精密に明らかにしていく前段階として、待遇表現行動の基本的な機構を示す論者のモデルを提示し、それをもとにして研究されるべき課題を9点に分けて提示した。モデルには、従来にも指摘されてきた、場面が言語表現に影響を与える過程のほかに、言語変種に対する主体の評価的認識が待遇表現の選択に影響を与える過程を新しく組み込み、研究課題としてとりあげた。また、主体の持つ社会的・心理的属性の影響、および、外在的環境、言語変種に加わる社会的決定も、待遇表現行動研究の一環として位置づけた。

第2章「洞輪沢集落における待遇表現行動——調査の概要——」

調査の概要、分析の基本的態度、および、調査地域・調査対象者のプロフィールをここで述べた。

調査は、1978年6月30日から7月18日にかけて論者が単独に行なった面接調査で、東京都八丈町末吉洞輪沢に在住する中学生以上の成員約90人を対象にしたものである。

第3章「洞輪沢集落の村落生活と対人場面の形成」

何が、場面の高低を形成する要因となるかは、従来、実証的な解明があまりなされていなかったテーマである。

観察するための調査方法に対する知見を述べながら、対人場面形成の要因を探るために作製した論者の調査方法を説明し、それにもとづいた調査結果から上記のテーマの考察を行なった。

その結果、洞輪沢においては、少なくとも未知・地位・年齢という要因が対人場面の高低を形成する要因となること。高い場面を作る要因間の優先順は、未知・地位・年齢の順に先行し、当地では、少なくとも調査時点においては、家格はあまり関係しないことを明らかにした。

また、男女では、これらの要因の利き方に差があることを明らかにした。

第4章「場面と言語」

「ココニアンタノナマエヲカケ」という表現（下線部）をとりあげ、対人場面によりどのような表現が選択されるか、場面と言語表現の関係について一端を考察した。

まず、共通語についてであるが、この調査資料の限りから分析したところでは、少なくとも4種の使用のされ方があることを明らかにした。

「村内場面」において用いられる「カケ」を表わす表現には、まとめると6類あるが、その中で比較的年齢差を無視できる「カイケタモーレ類」「カイケケロ類」「カケ類」の場面による使用の実態を記述した。そのとき、「女性は一般に男性よりていねいな言い方をする」という使用上（運用上）の傾向を差し引いてもなお残る男女の差異に注目し、これを、待遇価（待遇的意味）の差として結論づけた。

第5章「場面による言語表現を規定するもの——評価的認識をとりあげて——」

「ココニアンタノナマエヲカケ」「ワタシガイク」（下線部）にあたる待遇表現形式について、(イ)使用するかしらないか（使用意識と呼ぶ）、(ロ)ていねいだと思う順（順位意識と呼ぶ）、(ハ)場面別に設定された相手に対してそれを使用できるかどうか、失礼ではないか、ていねいすぎはしないか（使用許容域の意識と呼ぶ）、を尋ねた。

(イ)(ロ)について、「イク」にあたる表現では、イッテケロワとイコワのていねいさの順位意識に男女で逆転があり、女性の6割がイッテケロワをイコワより低く認識していることを明らかにした。そしてこの場合は、ていねいさの順位意識の上で低く認識されたことが、女性のイッテケロワの使用を制限するひとつの要因となっていると考察した。

(ハ)については、「カケ」にあたる4つの表現につい

